

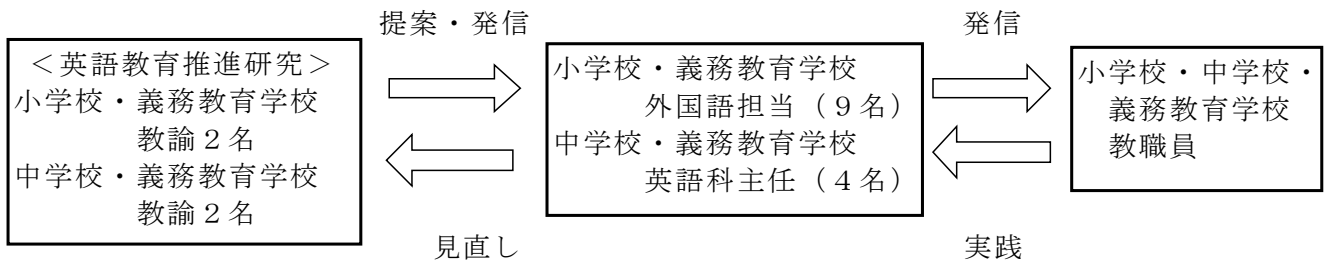
# 外国語科（英語）教育研究

## 1 はじめに

下野市学校教育計画では、基本方針8「学び」と「育ち」をつなぐ小中一貫教育の推進の中で、外国語教育における「小中の学びをつなぐ指導の充実」を目指してきた。

本研究会においては、各学校における外国語活動及び外国語科の充実を図るため、指導の工夫・改善について研究を進めた。

## 2 研究組織



## 3 研究内容

- (1) 小学校・中学校・義務教育学校における言語活動の充実に向けた「目的・場面・状況の設定の工夫」
- (2) 「しもつけ未来学習テキスト」活用方法の検討

## 4 研究の実際

### 事例1 小学校・義務教育学校前期課程（1年生）

#### (1) 実践紹介

本実践では、自分の好きなものを友達に知ってもらう活動を通して、児童がコミュニケーションの楽しさを実感できるように単元を設定した。活動の中で「I like ---.」の使い方を理解し、活用することで表現の幅が広がり、自分の考えや気持ちが相手に伝わる楽しさを、児童が実感できると考えた。

また既習の単語を活かし、意欲的に活動に取り組むことができるよう目的や場面、状況を設定し、実践を行った。ペアワークやグループワークを取り入れ、相手に分かりやすく伝える方法を考える活動を通して、相手意識を高めることができると考えた。

入学して約1年が経過し、新しい学級や環境にも徐々に慣れ、友達とのつながりが深まりつつある時期でもある。自分や友達への新たな気付きや関係作りを促すきっかけとなると考えた。

#### ◇学習のねらい

学級の友達に自分のことを知ってもらうために、相手に伝わるように工夫しながら、食べ物やスポーツ、色など、身の回りのものについて、自分や友達が好きなものを話したり聞いたりして伝え合う。

#### ◇学習の流れ

- ・単元の前半では、単語の習得を中心に学習を実施する。後半は、例文を用いて聞いたり話したりする活動を中心に設定し、取り組む。
- ・学習のねらいである「友達に自分のことを知ってもらう」ことを確認し、友達に分かりやすく伝えるために必要なことについて考える。
- ・言語材料に応じて、どのようなジェスチャーや動作ができるか全体で確認する。
- ・ジェスチャーや動作を交えて、学級の友達に自分の好きなものを伝える。

## (2) 成果と課題

- 単元計画の前半で、単語を中心に習熟できる活動を多く取り入れたことで、後半の活動に自信をもって取り組むことができた。
- 「友達の好きなものを知る」ことを明確にして活動に取り組んだことで、児童が友達のことを知る喜びやコミュニケーションの楽しさを実感することができた。
- 中間の振り返りを設け、単語やジェスチャーの仕方等を確認したことで、その後の活動では、児童が更に意欲的にコミュニケーションを図る様子が見られた。
- △単語の確認を丁寧に行ったことで、活動の時間が短くなり十分に時間を確保することができなかった。学習に用いる単語を精選するなどして、単語を確認する活動と言語活動とのバランスを考えたい。
- △自分の好きなことを一方的に伝えることができる児童は多く見られたが、言われたことに対してジェスチャーをしながら反応することが難しい様子だった。自分が伝えるだけではなく、相手の話を聞き反応を示すことで、より良いコミュニケーションになることを実感させたい。

### 【活動の様子】



### 事例2 小学校・義務教育学校前期課程（4年生）

## (1) 実践紹介 (Let's Try!2 Unit7 What do you want?)

### ◇学習のねらい

欲しい物やその個数を尋ねたり要求したりする表現を使って、誰かのためにオリジナルピザを作ることができる。

### ◇学習の流れ

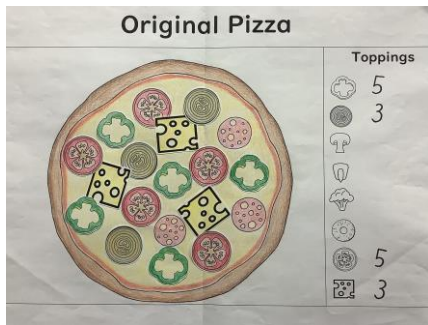
- ・単語の確認をし、英語での野菜の言い方を思い出せるようにする。
- ・チャンツ「What do you want?」を歌い、活動で使うフレーズの練習をする。
- ・T1 が作ったピザを見せながら、誰のためにどうしてそのようなピザにしたのかを説明する。
- ・誰のためにどんなピザを作るかを考えながら、ワークシートに必要な食材の個数を書き込む。
- ・お店屋さんとお客さんの2グループに分かれ、お店屋さんごっこの要領でやり取りをし、欲しい食材を集める。
- ・集めた食材カードに色を塗り、ワークシートに貼り付ける。
- ・付け足したい食材がある場合には、絵で付け足すなどしてピザを完成させる。

## (2) 成果と課題

- 初めに T1 が作ったピザを紹介したことで、「自分も誰かのためにピザを作ろう」という相手意識や、「そのために必要な食材を集めよう」という目的意識をもって活動することができた。
- チャンツやパフェ作りなどで買い物の際に使うフレーズを繰り返し練習してきたことで、買い物をする場面で自然と英語を使ってやり取りができていた。

- パフェ作りは ICT を使って行ったが、食材カードを用いて実際にやり取りを行うことで、実感を伴った活動となった。
- 買い物をした食材の他に、作る相手の好みに合わせて食材を付け足したことで、相手のことを考え意欲的に活動できた。
- △ピザを作る相手に好きな食材をインタビューし、その結果を反映させてピザを作るようにすることで、更に相手意識や目的意識を高めることができたのではないかと考えた。
- △食材の方だけを見て買い物をしたり、あいさつをせずにやり取りを始めてしまったりする児童が多かったため、実際の買い物の場面を意識したやり取りができるよう声掛けをする必要があったと感じた。

### 【活動の様子】



### 事例 3 中学校・義務教育学校後期課程（3年生・9年生）

#### (1) 実践紹介（NEW HORIZON English Course3 Stage Activity2 Discover Japan）

##### ◇学習のねらい

ALT に日本文化をより理解してもらえるよう、詳細な情報を加えながら伝えることができる。

##### ◇学習の流れ

- ・ALT に紹介したい日本文化について各自一つ選び、iPad を活用し詳細を調べた。紹介したい日本文化については伝統的なものから、サブカルチャー、言語や習慣など生徒たちが自ら紹介したいと思う事柄を選んだ。
- ・発表内容が決まった後、学習グループ内でお互いの発表内容についてアドバイスをし合った。
- ・ALT により理解を深めてもらえるよう、詳細を加えたプレゼンテーションを Key Note を使い作成した。その際、既習事項・単語を活用するよう促した。
- ・1人3分の持ち時間内にプレゼンテーションをした後、ALT とクラスメイトからの質問に答えるなど、英語でやり取りを行った。

#### (2) 成果と課題

- プレゼンテーションを行う目的や発表する相手が明確だったため、生徒たちは目的意識をもって活動に取り組むことができた。特に「詳細な情報を加える」についても、既習事項を活用し伝えることができた。
- 生徒自身に興味関心のある事柄について、プレゼンテーションを作成したため、比較的自分の気持ちなどを表現しやすく、意欲的に活動できた。
- 学習グループ内でプレゼンテーションする内容を伝え合った際、ALT に理解を深めてもらうために、必要な情報についてお互いにアドバイスをしたことで、自分では気付かなかった情報を加えて発表することができた。
- プレゼンテーション後に Q&A を設けたことで、ALT やクラスメイトとの英語でのやり取りを行うことができ、より理解を深めることができた。
- ALT からのフィードバックもあり、英語学習への意欲が高まった。



- ・ ALT が生まれた国の文化や習慣に関する説明を聞き、相手の文化や習慣について理解を深める。（説明は ALT が行い、日本との違いに着目させる。）
- ・ 互いの文化や習慣を踏まえ、紹介したい日本の文化や習慣についてマッピングを行い、扱う内容を整理する。
- ・ 紹介したい文化や習慣が決定したら、ALT に事前インタビューを行う。インタビューを通して、ALT のもつ情報を確認する。

（選んだトピックに関して、相手がどの程度の知識をもっているのかを調べる。）

- ・ 聞いたことがない
- ・ 聞いたことはあるが、詳しくは知らない
- ・ 聞いたことや見たことがあり、既に内容を理解している 等



- ・ ALT のもつ日本についての情報に応じて、内容を精選したり、言い回しを工夫したりしてライティングを行う。（「相手がより深く理解するため」に、どの程度丁寧に説明するべきか、どのような言い回しがより適切かを考えさせる。）

## （２）成果と課題

- 相手のもつ情報量に応じて、相手に馴染み深い例を示したり（例１）、既知の内容を扱う場合には、より深い内容を取り入れたりする（例２）等の記述が見られた。このように、活動目的を踏まえた事前インタビュー活動は、相手意識をもたせ、思考力、判断力、表現力等を高める手段として効果的であった。

例１：Osechi is eaten on New Year's Day. It's like milk rice in your country.

例２：You know the word, "sumimasen". How about "dogeza"?

△活動の前提として、生徒自身が日本の文化や習慣についてよく理解し、必要な情報を取捨選択するために必要な知識を身に付けている必要がある。

△日本文化に理解がある ALT に対しては、活動の必然性に欠けてしまうと感じた。